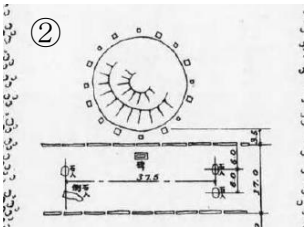
朝鮮石人像を訪ねて（68）

深田 晃二

～高麗陵墓報告書、楽浪古墳、宋山里、石窟庵、仏国寺、文化財返還問題～

1．今西龍「高麗諸陵墓調査報告書」（高麗関連）

今西龍の標記の報告書に陵墓周辺の石造物の手がかりがあるかもしれないと前号で書いた。国立国会図書館のデジタルコレクションの「古蹟調査報告書（朝鮮総督府）：1937 年」[6]の中に 294 頁に亘り、この報告書が掲載されていた。初版は 1917 年である。開城周辺の 45 基の王陵の墳墓の外部配置について、一部は内部についての詳細調査報告書である。



図①は開城郡中西面鵠嶺里七陵郡中第一陵として載っている写真で、図②はその配置図と計測図である。ダウンロードが可能なので PDF で保存したが解像度は悪い。高麗時代の墳墓の石造物についての貴重な、そして豊富な資料が手に入った。写真から朝鮮王陵との違いとして、まず、曲墻（墳墓の廻りの塀）が無い事、代わりに各 8 基の石虎と角柱が交互に墳墓を取り巻いていることが分かる。

開城一帯の高麗時代遺跡が 2013 年 06 月に「開城歴史遺跡地区」としてユネスコの世界文化遺産に登録された。2004 年に登録された「高句麗古墳群」に続き 2 つ目のユネスコ世界遺産である。王陵には太祖王建の陵や恭愍王陵、忠穆王の墓である明陵、墓主が明らかでない墓郡の七陵郡（図①、②）などを含む。

これらの世界遺産の陵墓は、前号で書いたように 1910～1930 年代に日本の総督府の古蹟調査と、それに便乗した盗掘に遭った所で、副葬品のほとんどは日本に運ばれているものと考えられる。

2．楽浪古墳の究明　（高句麗関連）

今西龍の文献 7 をネットで入手できた。1916 年から始まる大同江流域の高句麗と楽浪の遺跡に関しての「大同江の古墳と楽浪王氏との関係」という興味深い論文がある。断片的かつ少し長い引用になるが紹介したい。（『この字体は引用部分』を示す。また引用文中の「･･･」は中略を示す。）

『朝鮮平安道平壌附近の古墳に石槨と塼槨（せんかく：塼とはタイル状の平瓦）の二種類あり。･･･大同江北の石槨古墳は明らかに高句麗の遺物と認めるべきもの。塼槨古墳は大同江の南･･･丘陵地に多数遺存し、恐らくは千を持って数うべし。［引用者注：針替埋平は“その数 3 千以上”、また別の記録では“約 1400 基の古墳の中でかろうじて発掘を免れた古墳は約 140 基に過ぎない”と書いている。[4]（図③参照）］･･･その大型なるものの一を浚掘せられ、（荻野）博士の調査せられたるにあり。･･･塼槨内発見の遺物は 2 個の大甕、4 個の小瓶あるいは鉢、鉄刀、斧鋤の如き鉄物、長宜子孫竟覆輪［ふくりん：馬具や茶碗など器物の縁を金属の類でおおい飾ったもの］様の鍍金々具 2 種両 3 個分、リウゴ[輪鼓]様の紫玉器、小銀輪、銅の指輪様のもの、用法不明の銅條、漆塗の痕のある土塊等なるが、その内鉄刀断片の外は盡く整理修繕して文科大学列品室に保蔵せり。』[7]

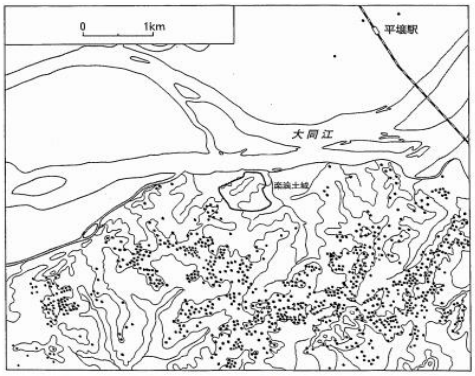


図 2．朝鮮・平壌市楽浪区域一帯の楽浪古墳分布図（駒井1972をもとに作成）

図③「楽浪郡と三韓の交易システムの形成(高久健二著)」より引用

保蔵したのは今西龍の勤務先の京都大学の文学部陳列館であろう。全て日本に持って帰っている様子が窺える。他の古墳からは、古鏡、青銅器、漆器、墓誌などの埋葬品が出土している。

覆輪金具に 2 文字が刻印してあるが、王■と 2 文字目が不明である。この地は歴史的に支配者が入れ替わった地で、次の 4 候補から王氏は誰かの探求を含め、どの時代の誰の古墳かの検討が行われている。（1）古朝鮮：漢民族（2）楽浪の漢人（3）高句麗（4）高麗もしくは李朝人

『石槨古墳の高句麗の遺物たること更に疑を容れずと雖、塼槨古墳に至りては疑あり、･･･間もなく塼槨古墳も石槨古墳と同じく高句麗の遺物なりと確信するに至れり。』[7]（284 頁）として 3 つの理由をあげている。後で問題となる 2 つ目の理由は、『楽浪帯方の守令は皆中央政府より派遣せられたる人なるが故に、其墳墓を任地に残すが如きは稀有なるべし、而して僻遠の小郡たる此地の土着民には、此等塼槨古墳を作成する富も力も存ぜざりしなるべし。』[7]としている。が、289 頁では一転『小生が先に高句麗古墳と設定せし理由の第 2 が誤謬なるに當りては、之を楽浪王氏関係のものとすること穏当にして、高

句麗王氏関係のものとするのは牽強たるを免れず。小生従来執りし、高句麗説を撤回して楽浪説に従うものなり。』[7]としている。なぜ撤回したのか。

朝鮮総督府が最初に実施した古墳調査は 1916 年からの楽浪郡古墳であり、目的は『豊富な遺物の取り出しにもあったが、その遺物の「考古学的考証」で、朝鮮は早い時期から中国の支配下にあり、その後の文化はすべて中国の影響によるもので、朝鮮独自の文化的発展はなかった』[4] と強弁して、南の任那と北の楽浪に挟まれた朝鮮を『「他律性」史観で論陣を張り、朝鮮人民の民俗的誇りや自立性を削ごうとした。』[4] からだと言われる。

朝鮮遺跡の権威者である関野貞は、著書で一度は大同江周辺の古墳が高句麗古墳であることを発表した。今西龍の最初の判断と同じである。しかし、総督府と近い人類学者の鳥居龍蔵が、高句麗古墳ではなく中国・漢時代の文物を内包した「楽浪古墳」だと反論したという。『総督府は中国やロシアと朝鮮の覇権を争っていた時代には、両国の朝鮮に及ぼした歴史の痕跡を否定しようとした。併合により支配者になってからは、逆に中国・漢時代の「楽浪古墳」であると言い立てた。』[4]

関野貞も鳥居龍蔵について反論せず沈黙を保ったと言うから、今西龍も同様に総督府を意識して、あるいは何らかの干渉があって意見を変えたのではないかと考えられる。日本人学者に共通する姿勢だったようで、御用学者と指弾されている所以である。

3．宋山里第 6 号墳　（百済関連）

1971 年に忠清南道・公州の宋山里古墳群で無盗掘の武寧王陵が発見され、世紀的大発見と言われた。ここは宋山里第 7 号墳とよばれ、塼でドーム状に作られた華麗な墳墓である。私は 2015 年の春にここを訪れた。写真④は墓を守る鎮墓獣、⑤は金の耳飾り、⑥は日本でしか採れないコウヤマキ製の柩で、

④

⑤

⑥

当時の百済と日本の交流を示すものと言われている（筆者撮影）。

写真は全て複製品と思われるが、そっくりに再現された古墳の内部や近くの国立公州博物館に展示してあるものである。

そのほかにも環頭太刀や金属工芸品・玉類・香呂等の副葬品が約３千点出土している。

宋山里第 6 号墳は武寧王陵のとなりにあり、同様の副葬品があったと思われるが、1925 年に朝鮮に渡った高等普通学校教師の軽部慈恵による盗掘に遭っている。文章的につながらないがママ転記する。

『帰国後に書いた随筆の中で、「私の墓掘りもこの時（赴任直後）から始まったと言える。昭和 7 (1932)年の暮れまでに、738 基の 1 つ、宋山里第 6 号墳は、百済古墳としては珍しい四神図が描かれていた学術的にも特筆すべき古墳だった」と述べている。軽部は単独でこの古墳に侵入し、中の遺物を着服して、敗戦直後に日本へ持ち帰った。･･･1970 年の死亡に至るまで、自分が盗掘者本人であり、武寧王陵に匹敵する遺物の所持者である事を頑なに否定し、罪深い謎を残したまま世を去った。』[4]

4．石窟庵五層小塔　（新羅関連）

1909 年の秋、第 2 代統監の曽根荒助（そね・あらすけ）が随員を従えて慶州の石窟庵にやってきた。

『一行は仏国寺を見学した後、山頂にある石窟庵まで上ってきた。ところが、かれらが石窟庵の見学を終えて立ち去ったあとをみると、窟内に以前から置かれてあった優雅な姿の大理石製の五重小塔が忽然と消えていたのだ。小塔をみた曽根がとっさに所有欲をかきたてられたか、あるいは皇室への最上の献上品と思い立って、奪ったにちがいない。･･･諸鹿央雄は「･･･高貴な某高官の巡察後、いずれかにその姿を消してしまった･･･」。･･･柳宗悦は「･･･小さな優秀な五重塔が 1 個安置してあったという。これは、のちに曽根統監が持って行かれたのだと言われているが真偽のほどは不明である」。･･･中村亮平は「･･･優秀な五重の塔が安置してあったのに･･･むなしく台座が置かれているのみである。流説によると、某氏の邸宅に持ち運ばれてあるとかいう事である」。

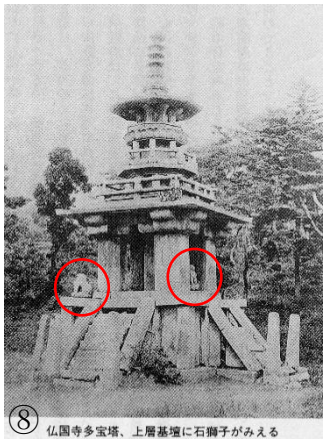
1967 年に作製された［韓国の］“石窟庵修理工事報告書”もこの事件についてふれ、「曽根に略奪された」とはっきり断言している。』[1]

5．仏国寺の多宝塔石獅子　（新羅関連）

慶州の仏国寺に五重の塔と向かい合わせにある多宝塔に獅子像が 1 つ残存している。もともと 4 体あったが、保存状態が悪かった 1 体を残し、順次 3 体が持ち去られたという。曽根統監の慶州見学の案内役だった木村静雄の回顧談から一対が内地に搬出されたことが分かっている。1 体は大英博物館にあると言うが真偽のほどはわからない。2015 年秋に、この獅子像の行方を調査している韓国 KBS の取材を受けたことがある。石人像の関係で飛田さんが紹介してくれたのだ。現在 1 体しかない事は知っていたが、3 体の行方に関しては知らないので、役に立たなかったが、以降は獅子を見る度に気に掛けている。後で番組ＤＶＤを送って頂いた。（KBS 다큐 1. 다보탑 돌사자-실종 100 년의 미스터리“돌사자　세 마리는 어디로 사라졌나”）（KBS ﾄﾞｷｭﾒﾝﾀﾘ 1。多

宝塔石獅子ー失踪 100 年のﾐｽﾃﾘｰ“石獅子 4 体はどこへ消えたか”）。日本各地やイギリス等で取材したが、結局行方は分からなかったようである。

⑦


⑧ 仏国寺多宝塔、上層基壇に石獅子がみえる

図⑦は 2013 年春に仏国寺多宝塔前で同行の寺岡さんに撮ってもらったものである。当然、獅子は 1 体のみである。同行と言うより私が寺岡さんにくっついていったのだ。仏国寺駅で降りて文化財研究所に寄ると、偶然寺岡さんの顔見知りの研究員と会い私も図録を頂いた。車の人は近いと言うが、歩くと距離が遠いなーなどと話ながら行ったことを懐かしく思い出す。図⑧は文献 1 の 49 頁にある写真で、獅子像が 2 体ある時期の写真である。年月は不明。

6．高麗青磁

前号で高麗青磁は副葬品として埋葬されていたものしかなく、日常使いのものは無かったと紹介した。合評会で新安沖に沈没した船から青磁が大量に見つかったが、高麗青磁ではないかとの話が出た。

ウィキペディアによると『新安沈船（しんあんちんせん）は、1975 年に韓国の全羅南道新安郡の沖で発見された沈没船。新安沈没船、新安沖沈没船などの名称でも呼ばれる。船型は中国の伝統的な外洋船のジャンクに属する。調査の結果、この沈没船は発見された木簡から、東福寺再建のため元に派遣され、帰途の 1323 年に中国の慶元（現在の寧波）から日本の博多に向かっていた貿易船だったことが判明した。中国の元王朝時代の陶磁器や銅銭を大量に積んでおり、当時の東アジアの貿易を知る上で貴重な資料となっている。また、韓国の水中考古学が発展するきっかけにもなった』。とのことで、中国製の青磁であり、高麗青磁が貿易取引されたものではなく、日常使用が無かったことの否定にはならなかった。

7．文化財返還問題ー何を、どこに返還するのかー

楽浪遺跡でもみたように、長い歴史の内にその土地の支配者は変わり、国としての領域も変化する。

文献 8 では、『「文化財返還問題」とは、主に植民地期・戦時期に本国の組織・人びとが当時の圧倒的な力の差を背景に植民地あるいは占領地の人びとの同意を得ること無く不当に本国に持ち去った文化財を、「あるべき<もの>をあるべき<場>へ」という原則に基づいて、本来あるべき状態に回復する運動』と定義している。『･･･「植民地主義（コロニアリズム）の清算」という認識です。･･･もちろん日本に所在する全ての植民地由来の文化財が、返還すべき対象であるはずもありません。正当な商取引による購入や寄贈あるいは採集によってもたらされた文化財も多い事でしょう。』[8]

①「白い文化財」「黒い文化財」「灰色の文化財」があれば、まず黒い文化財を返還すべきだ。②博物館展示等でそのものの名称・時代・場所に加えてどうして今ここにあるのかという由来情報を併記するのが、その組織の倫理度をはかる基準となる。③所蔵している文化財の入手経路の正当性を証明する責任は、所蔵者にある。と主張する。

欧米などは、世界的に貴重な文化財は原産地国で所有されるよりも普遍的な博物館や美術館で展示されてこそ生かされるとする「文化国際主義」を主張する。一方、文化財の返還を要求する原産地国側は、該当する文化財を元の場所(現地)へ戻す「文化現地主義」を主張し、早急に返還を求める［優先遺物目録（Wish List）を公表しているという。

最近では「全人類共有の文化遺産」のような貴重な文化財は、その本来的な所有権は原産地国側にあり、現在の所有者は期限を限って貸し出された資料の一時的「保管者」に過ぎないという理解が広まっている。21 世紀ではこうした「レンタル期間」は既に終了している、と述べている。フランスの外奎章閣の逆方向の蔵書貸し出し方式も参考になる。

日本は「武力紛争の際の文化財の保護に関する 1954 年ハーグ条約」を 2007 年に批准。「1970 年ユネスコ条約」は 2002 年に批准。対応が非常に遅い。1973 年には「略奪文化財の返還」が国連で採択されて、1970 年ユネスコ条約の不備が補われている。

他国の領土において同意無く遺棄した化学兵器は、遺棄した当事国が責任を持って無害化すべしと言う条約があるが、「略奪文化財」も自らの費用で「原状回復の原則」に努めるべきだとしている。（続）

＜参考文献＞　（1.～5.は略記。詳細は通信 305 号参照）

1. 李亀烈「失われた朝鮮文化ー日本侵略下の韓国文化財秘話」
2. 黄壽永編「日帝期文化財被害資料・考古美術資料第二十二集」
3. 黄壽永編「韓国の失われた文化財」
4. 朝鮮大学校「奪われた朝鮮文化財、なぜ日本に（南永昌遺稿集）」
5. 荒井信一「コロニアリズムと文化財」
6.国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1157590
7. 今西龍遺著「朝鮮古史の研究」（1934 年刊の復刻本）、国書刊行会、1970.9.15
8.五十嵐彰「文化財返還問題を考えるー負の遺産を清算するためにー」岩波ブックレット、2019.11.6